

蒼葉

裾野市立深良中学校だより

平成 24 年 6 月 15 日(金)

第 10 号

発行人 校長 鈴木史良

自分の思いを伝える

—— 市「わたしの主張」大会での発表を通して ——

6月3日(日)に裾野市民文化センターで「わたしの主張」大会が開催されました。市内の小・中学校、高等学校から代表として17名の児童生徒が大勢の聴衆の前で熱弁をふるいました。深良中学校代表として中学生の部に登場したのが、3年生の菅沼早紀さんでした。早紀さんは東日本大震災で被災した地域の日も早い復興を願い、実際に現地に行って体験したことを踏まえながら、一所懸命な態度で発表できました。また、早紀さんの応援にと、多くの深中生が会場に駆けつけてくれました。では、菅沼早紀さんの主張をどうぞ!

東日本大震災から1年がた

ちました。みなさんはこの一年、被災地のためにどんな活動をしてきましたか? 募金活動をした人、支援物資を送った人、ボランティアにいった人など、さまざまな活動をした人がいると思います。

私は去年の夏、岩手県山田町にボランティアに行きました。そこでたくさんのがれきの山や、津波にのみ込まれた車が山積みになっている様子を目の当たりにしたわたしは、言葉を失いました。思わず目を覆いたくなる惨状に胸が締め付けられる思いでした。

3月になり、裾野市が山田町の被災がれきの受け入れを表明しました。私はこの話を聞き、被災地復興支援にはとてもよい方法だと思い、詳しく調べてみることにしました。裾野市では今年3月に被災がれきの受け入れを表明し、5月には試験焼却が行われる予定です。これは静岡県では島田市に次ぐ2番目の対応です。しかし、全国規模で考えるとその足並みは揃っておらず、受け入れを行っている地区は決して多くはありません。その原因として地域住民の反対の声があります。被災がれきを受け入れると自分たちも被爆してしまうのではないか」「被災がれきはどこに集められ、どこで焼却処分されるのか」という心配をしているからです。(中略)

被災がれきを受け入れ、焼却することで被災地の復興を支援することはできます。しかし一日も早い復興



説得力あふれる堂々としたスピーチ



教育長から表彰される早紀さん



出場者全員による記念撮影

を成し遂げるには、日本中がこの活動に協力すべきだと私は思います。一見、邪魔なゴミに過ぎないがれきも、被災された多くの方々には生活そのものだったのです。多くの人々の生活や思い出、そして命がこの中に詰まっているということを再認識し、被災者の思いにもっと寄り添うべきです。被災から1年という月日が流れ、私たちの記憶が薄れていくことがいけないことなのです。募金や物資を送ることも重要な活動ではありますが、今の日本に最も必要なのは、被災地の痛みを日本全体で分かち合うことだと思います。それには国民一人一人ががれき処理が進まない状況を認識し、協力の手を差し伸べることがたいせつなのではないでしょうか。震災は過ぎ去った過去の出来事ではありません。復興は私たち一人一人の手で成し遂げるのです。



未だ大量に残る被災地のがれき

長泉町でも被災がれきの受け入れを進めています。私の住む駿河平地区には町の塵芥処理場があるため、今月、住民に対して説明会が行われます。がれき処理について正しい知識をもち、風評に惑わされない判断をしようと思っています。

「薬学講座」で正しい知識を学ぶ

6月12日（水）5校時に学校薬剤師や沼津警察署員をお招きして「薬学講座」を実施いたしました。各学年のテーマは以下の通りです。

1年生 「自然治癒とくすり」

2年生 「酒・たばこと健康」

3年生 「薬物乱用を通して、自らの健康を考える」

どの学年の生徒たちも、講師の先生の話真剣に聞き入っていました。また途中でロールプレイ（演技）を取り入れた学年もあり、不良役の先生が勧めるたばこを必死で断る生徒の姿も見られました。

授業後、生徒たちは振り返りシートに自分の考えを記入し、学んだことを確認しました。薬についての正しい知識をもち、心と身体のバランスのとれた健康な毎日を過ごしてほしいと思います。



いろいろな薬に驚く1年生

教育実習生 荻野詩織先生の紹介

6月11日（月）から29日（金）の3週間、本校卒業生の荻野詩織さんが教育実習生として来校、教師になるための勉強をしています。よろしくお願いします。

＜荻野詩織先生の言葉＞



日本女子大の荻野詩織と申します。担当教科は社会科です。久しぶりの母校をととても懐かしく感じています。また、朝や帰りの生徒さんたちの挨拶には、いつも元気をもらっています。3週間という短い間ですが、精一杯がんばります。